

Principal Correspondence

リリベールの自立の心はここからきています

最近の日本の諸相を見ていると日本人は欲求のままに振る舞い、やせ我慢がなくなってきたように思います(私の反省も含めて…)

特に、作家の司馬遼太郎さんがバブル期(約30年前)の日本人について「このバブルの風潮は人間をダメにし、日本人を悪くし、何十年もその後遺症で悩むことだろう」と看破しておられましたが、その通りになりました。元来、額に汗して働くことを尊ばず、投機や土地転がしで国民みんなが幸せになれるはずがなかったのですが、誰も浮かれて耳を貸さなかったのです。



「やせ我慢」とは「自立」の精神であります。

英国で生まれたゴルフもラグビーもサッカーも、雨であっても場合によっては嵐でもプレイします。馬鹿馬鹿しく見えるかもしれませんが「やせ我慢」の極致です。

このたくましいジョン・ブル精神(擬人化されたイギリスの国家像・イギリス人像)が、生き活きとしていたころ、大英帝国(ヴィクトリア女王の時代)は世界の覇者でした。



司馬遼太郎さんによると、日本も「武士は食わねど高楊枝」の武士道精神が生きていた明治の頃、世界の発展途上国の中でも恐ろしく賄賂が少なく、教育に投資をし、実力主義の生き活きとした時代だったといえます(司馬史観という見方もありますが私は賛成です)。それ故、日本は当時(有色人種でほぼ唯一と言ってよいでしょう)の先進国になり、現在も数少ない有色人種先進国であります。

自立は「自己犠牲」も伴います。およそ人は経済原理で動く動物ですが(つまり損得勘定で基本的に動いている)、その中でも社会や国家のため、あるいは広く人類のために志を持って動く人がおります。あるいは誰もが心の何パーセントか(人によっては何十パーセント)「社会のために」尽くす志を持っていると言った方が適当かもしれません。

これからは「自己犠牲」の精神を持つ人がどれだけいるかで、国力がはかれる時代であると思います。

ただし、その自己犠牲、奉仕の精神は、誰かに強要されるものではなく、個人の自由意思で決めるものであり、そこが戦前の自己犠牲とは異なるべきであります。

人々の心から毅然とした誇りや、やせ我慢が無くなって、万事、安易な方安易な方へと流れるとき、ひとつの文明は内部から崩壊していくのは歴史の語るどころです。

Principal Correspondence

イソップから学ぶ

イソップ物語は、今から二千数百年も前に古代ギリシャのイソップ（元は奴隷であったとも言われる）によって書かれた寓話集です。なかには例えば「蟬とアリ（蟬のいない国もあるので今は『アリとキリギリス』と言うところが多い）があります。



キリギリスは夏中歌って暮らした。アリは夏中働いて暮らした。

やがて秋が来て、冬が来て飢えたキリギリスは何とかしてくれないかとアリの家の戸をたたいた。

アリが問うには『あんたは夏の間中何をしていた？』キリギリスが答えた『歌って暮らしていた。』

アリは『それじゃあ冬は踊って暮らすがいい。』と、ぴしゃりと戸を立てたという話です。

これが本物のイソップなのです。残酷といえば残酷、当然と言えば当然な話だから3000年近く残っているのです。

ところが今の出版されているイソップは、時代と子どもにおもねって迎合している。現代版イソップでアリはなんとキリギリスにこう言うのです。

『それは気の毒だ。それじゃあここにあるものを召し上がれ。だけど来年は夏の間も少しは働かなくてははいけないよ……。』

『冬は踊って暮らすがいい。』と突き放すからこの話は、何千年の風雪に耐えて勤勉の大事さの教訓として残ったのです。それを今の時代に合わせて浅薄に直してしまっただけでは、かえって教育的な意義がない。子供心にショックを受けるからこそ、それが心に残って、大きくなったらその意味が理解できる時がくる。

評論家の山本夏彦さんがイソップ物語について上の様なエッセイを書かれておられます。

そういえば……。私も桃太郎が鬼を退治したままでは、鬼が可哀想だからといって最後に鬼と仲良しになる結末をよく話してきましたが、はたして子ども達はそこから何の教訓も学んでいなかったかもしれないと反省させられました。

